

【国語】（五〇分）（満点…一〇〇点）

【注意】 すべての問題において、句読点は一字と数えるものとする。

□ 次の文のカタカナは漢字に、漢字はひらがなになおしなさい。送りがなが必要なものはあわせて書くこと。

- ① 明るくホガラカナ性格だ。
- ② リンジの電車が出るそうだ。
- ③ 電池をヘイレツにつなぐ。
- ④ 資料を後世に長くホゾンする。
- ⑤ 安くてヒョウバンの店。
- ⑥ こわれた機械をシユウリする。
- ⑦ 国語のセイセキが上がる。
- ⑧ 推理作家になることを志す。
- ⑨ 身の潔白を証明したい。
- ⑩ 作品が人々に絶賛される。

□ 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

度十はいつも縄の帯をしめて、わらつて森の中や畑の間をゆつくりあ

るいているのです。雨の中の青いやぶを見ては、よろこんで目を

1 させ、青ぞらを

どこまでもかけて行きたかを見つけては、はねあがつて手をたいてみ

んなに知らせました。けれどあんまり子どもらが度十をばかにしてわらうものですから、度十はだんだんわらないふりをするようになりました。

風がどうとふいて、ぶなの葉が

2 光るときなどは、度十はもう

うれしくてうれしくて、ひとりでにわらえてしかたないのを、むりやり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながら、いつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立っているのです。

ときにはその大きくあいた口の横わきを、さもかゆいようなふりをし

て指でこすりながら、はあはあ息だけでわらいました。なるほど遠くから見ると度十は口の横わきをかいているか、あるいはあくびでもしているかのように見えました、近くではもちろんわらっている息の音もきこえましたし、くちびるが

3 動いているのもわかりましたから、子どもらはやっぱりそればかりにしてわらいました。

おっかさんにいつつけられると度十は水を五百ばいでもくみました。一日いっぱい畑の草もとりました。けれども度十のおっかさんもおとうさんもなかなかそんなことを度十にいつつけようとはしませんでした。

さて、度十の家のうしろにちようど大きな運動場ぐらいの野原がまだ畑にならないで残っていました。

ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新しい草も芽を出さない時、

度十はいきなり田打ちをしていた家の人たちの前に走ってきていいました。

「お母、おらさ杉苗七百本、買ってける。」

度十のおっかさんは、きらきらの三本ぐわを動かすのをやめて、じつと度十の顔を見ていいました。

「杉苗七百ど、どこさ植えらら。」

「家のうしろの野原さ。」

そのとき度十のいさんがいいました。

「慶十、あそこは杉植えでも成長らないところだ。それより少し田でも打って助ける。」

慶十はきまり悪そうに 4 して下をむいてしまいました。

すると慶十のおとうさんがむこうで汗をふきながらからだをのぼして、

「買ってやれ、買ってやれ。慶十あ今まで何一つだてたのんだごとないがつたもの。買ってやれ。」といいましたので慶十のおかさんも安心したようにわらいました。

慶十はまるでよろこんですぐに家にほうへ走りまわりました。

そして納屋から唐くわをもち出して、ぼくりぼくりと芝を起こして、

杉苗を植える穴を掘りはじめました。

慶十のにいさんがあとを追ってきてそれを見ていいました。

「慶十、杉あ植える時、掘らないばわがないんだじゃ。あしたまでま

て。おれ、苗買ってきてやるがら。」

慶十はきまり悪そうにくわをおきました。

つぎの日、空はよく晴れて山の雪はまつ白に光り、ひばりは高く高くのぼってチークチークやりました。そして慶十はまるでこらえきれないようにここにこにこわらつて、にいさんに教えられたように、こんどは北の方のさかいから杉苗の穴を掘りはじめました。じつにまつすぐにじつに間隔正しくそれを掘ったのでした。慶十のにいさんがそこへ一本ずつ苗を植えていきました。

そのとき野原の北側に畑をもっている平二が、きせるをくわえてふところ手をして寒そうに肩をすばめてやってきました。平二は百姓も少しはしていましたが、じつはもつと別の、人にいやがられるようなことも

仕事にしてみました。平二は慶十にいいました。

「やい、慶十、ここさ杉植えるなんてやつぱりばかだな。第一おらの畑あ日かげにならな。」

慶十は顔を赤くして何かいいたそうにしましたがいえなくてもじもじしました。

すると慶十のにいさんが、

「平二さん、おはようがす。」といつてむこうに立ちあがりましたので、

平二は 5 いいながら、またのつそりとむこうへ行つてしまいました。

その芝原へ杉を植えることを笑つたものはけつして平二だけではありませんでした。あんなところに杉など育つものでもない、底はかたい粘土なんだ、やつぱりばかはばかだとみんながいつておりました。

それはまつたくそのとおりでした。杉は五年までは緑いろの心がまつすぐ空のほうへのびていきましたが、もうそれからはだんだん頭がまるくかわつて七年目も八年目もやつぱり丈が九尺（一尺は約三〇・三センチ。寸の十倍。）ぐらいいました。

ある朝、慶十が林の前に立っていますと、ひとりの百姓がじょうだんにいいました。

「おおい、慶十。あの杉あ枝打ちさないのが。」

「枝打ちていうのは何だい。」

「枝打ちつのは下のほうの枝、山刀で落とすのさ。」

「おらも枝打ちするべがな。」

慶十は走つて行つて山刀をもつてきました。

そしてかたつぱしから、ばちばち杉の下枝をはらいはじめました。と

ころがただ九尺の杉ですから、度十は少しからだをまげて、杉の木の下にくぐらなければなりませんでした。

夕方になったときは、どの木も上の枝をただ三、四本ずつ残して、あとはすっきりはらいおとされていきました。

こい緑いろの枝はいちめんに下草をうずめ、その小さな林はあかるくがらんとなくなってしまいました。

度十はいっぺんにあんまりがらんとしたので、なんだか気持ちが悪くて胸が痛いように思いました。

そこへちようど度十のいさんが畑から帰ってやってきましたが、林を見て思わずわらいました。そしてぼんやり立っている度十にきげんよくなりました。

「おう。枝集めべ、いいたぎものうんとできだ。林もりっぱになつたな。」

そこで度十もやつと安心して、にいさんといっしょに杉の木の下にくぐって、落とした枝をすつかり集めました。

下草はみじかくてきれいで、まるで仙人たちが碁でもうつところのように見えました。(宮沢賢治著「度十公園林」(岩波書店)より)

問一 [1] [5] に入る語を次のア〜オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ぶつぶつ イ ピクピク ウ チラチラ
エ もじもじ オ パチパチ

問二 度十がきちようめんでまじめな性格だということがわかる一文を四つ抜き出し、それぞれ最初の五字を答えなさい。

問三 度十が杉を植えようとした時、「にいさん」「平二」をはじめみんなが反対した理由を本文のことはを用いて二十字以内で答えなさい。

問四 ———線について答えなさい。

① 「おかあさん」はなぜ安心したのですか。二十五字以内で答えなさい。

② その「おかあさん」の心と同じような思いから出た「にいさん」のせりふを二つ抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問五 本文を二つに分けたとき後半はどこから始まりますか。後半の初めの五字を答えなさい。

③ 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

平成八(一九九六)年十二月の新聞で、長年ロボットを研究してきた科学者・技術者たちが、[1]、人間と同じように二本足で歩くロボットを完成させたというニュースが報道された。この科学者たちの合い言葉は、「鉄腕アトムを作ろう!」だったという。また、通産省(現在の経済産業省)でも二本足で歩く鉄腕アトム型ロボットの開発プランを進めているという。昭和二十七(一九五二)年から連さいされた漫画「鉄腕アトム」にし激された人たちが、四十五年後に、とうとうアトムを作り上げたのだ。

この「鉄腕アトム」の作者である手塚治虫は、科学技術の進歩の中で、人間がいかにあるべきかをいつも考え、それを漫画にえがいてきた。「鉄腕アトム」が、それだけ長い間科学者たちをほげまし続けてきたのは、その中に新しい①アイデアがあり、問題がこめられていたからだろう。

[2]、手塚治虫とはどういう漫画家だったのだろうか。

手塚治虫の本名は手塚治という。昭和三（一九二八）年十一月三日に大阪府豊中市で生まれ、兵庫県宝塚市で育った。こん虫が大好きだった治は、小学五年生のころ、オサムシという虫を見て、「治」の下に「虫」という字を付けて、手塚治虫と書くようになった。

手塚治虫は、昭和二十一年に、四こま漫画「マアチャンの日記帳」を発表、十七才で漫画家としてデビューした。続いて「新宝島」「ロストワールド」といった漫画単行本を四十冊近くもかき下ろした。二十五年から「ジャングル大帝」などを雑誌に連載し、二十七年に連載開始の「鉄腕アトム」でいちやく人気漫画家となった。三十八年には、「鉄腕アトム」を日本の漫画で初めてテレビアニメ化し、この面でも、視覚文化の開拓者となった。題材のうえでも技法の面でも漫画家の先頭にあつて、日本中の子どもや、大人たちまでも夢中にさせた。

こうして四十数年間にえがいた漫画は作品数にして七百編余り、原稿枚数にして十五万枚、制作したアニメーションは六十本以上になる。

手塚の作品はバラエティーに富み、「ジャングル大帝」で、アフリカの動物たちの世界に招待してくれるかと思うと、「鉄腕アトム」で、二十世紀の科学文明を見せてくれる。「リボンの騎士」では、少女漫画に物語性を取り入れるとともに、大きい目、光るひとみ、すんなりと長い手足のヒロイン像を作り出し、現在の少女漫画につながるスタイルを生み出した。「火の鳥」では、古代と未来の宇宙時代とを代わる代わるえがいて、時間と空間を包みこむ永遠の生命と人間の足跡を語った。また、医者をも主人公にした「ブラック・ジャック」では、命の尊さ、重さを考えさせてくれた。これらの作品を通じて、手塚治虫は人々を感動させ、多くの読者を得ただけでなく、自分も漫画をかきたいという思いを多く

の少年少女たちにいだかせた。そして、そういう中から、藤子不二雄・石ノ森章太郎などの漫画家が次々に育ち、ストーリー漫画の大きな流れが作り上げられていった。わたしたちが今楽しんでる多くの漫画は、こうしたつながりの中から生まれてきたのだ。

少年時代の治虫は、本が好きだった。学校へ通う電車の中でも、家に帰ってからでも、おとぎ話や探しての小説、文学全集、それにこん虫や天文などの図かん・科学読み物という具合に、本の世界にひたりきった。本だけでなく、治虫は外で遊ぶことも好きだった。原っぱや雑木林、池のほとりや道路が遊び場だ。日が暮れるまで走り回った。3 ここん虫が好きで、くわがた・かぶと虫・ちようちようなどを追いかけた。こん虫の標本を作り、ペンと色えん筆でこん虫図かんまでかいた。

そして、もちろん漫画が好きだった。父親に買ってもらった漫画が本だないっぱいに並んでいて、それをくり返し読んだ。妹たちと漫画をかいて、おもしろいストーリーとキャラクターを考え出した。中学卒業までにかいた漫画は二千枚にもなった。

しかし、小学校での治虫は、いじめられっ子だった。かみの毛の形をからかわれたり、眼鏡を取られたりした。治虫が学校から帰ってくる時、「今日は、学校で何回泣いたの？」と、お母さんは毎日のようにきき、「そのうちにいいことがあるから、かんにん、かんにん」と言うのだった。治虫は、なんとかいじめられないようにといろいろ考え、手品をやってみせたり、回覧誌を作ったりしたが、ききめがない。ある時、自分のかいた漫画をクラスで回したところ、「ふうん、お前、漫画うまいんやなあ」と感心され、それからはいじめられなくなった。

治虫の少年時代は、日本が中国やアメリカと戦争をしている時代だっ

た。治虫が中学に入学したところから戦争が激しくなって、学校も休みとなり、級友たちと共に兵器を作る軍じゅ工場^へで働かされた。食べ物も満足に^Aなく、いつもおなかをすかせていたが、漫画をかくことはやめなかった。しかし、4「それが見つかる」と「非国民！」とどなりつけられて、破り捨てられた。そして、アメリカのばくげき機の空しゅうもたびたび受けるようになった。

長い戦争が終わったのは昭和二十(一九四五)年八月十五日。手塚治虫は十六才になっていた。焼けあとにかがやく電灯が美しかった。生き延びることができてうれしかった。^②その喜びをかみしめながら、「もしかしたら漫画家になれるかもしれない」と思った。

手塚治虫は医者^の道を志していた。医学の学校を卒業し、昭和二十七年には国家試験に合格して医師の資格を取った。しかし、このころはすでに漫画家として活やくしており、5漫画家の道を選んだ。漫画をかくのが好きだったからであり、子どもが好きだったからである。それと、戦争が終わった日の感動——これから漫画を自由にかくことができるという喜びを忘れることができなかったからだろう。

手塚治虫は戦争中、軍事教練(訓練)で朝から夕方まで毎日しごかれたのと、ひどい食事による栄養失調で、両手が悪性の水虫におかされ、両うで切断^{すんぜん}前^{ぜん}になったことがある。また昭和二十年六月の大阪^{おおさか}大空しゅうでは、ほのおとなつて降り注ぐしゅういだん(ばくだん^の一種)の雨にさらされ、大人や子どもがいっぱい焼け死んでいるのを見た。それはこの世の終わり、地ごとくと言うのにふさわしい、すさまじい光景だった。その中を、死体をよけながら長い道のりを歩いて、ようやく宝塚^{たからづか}の家^のにたどり着いた。戦争は、手塚治虫から漫画をうばい取り、さら

に生命までうばおうとしたのである。

だから戦争が終わった日は、手塚治虫の漫画が始まった日になった。もう空しゅうで死ぬこともない、漫画をかいてもなぐられることはない。ただひたすら焼けあとの子どもたちに漫画をかいて見せてやること^Bができるという思いが、決意を新たにした。

子どもは、大人から真けんな呼びかけを求めている。真けんな語りかけには、必ず耳をかたむけてくれる。^③それが夢をふくらませるおもしろいものなら、なおさら目をかがやかせてくれるにちがいない。その呼びかけを、子どもが大好きな漫画に盛りこんでいこうと考えた。

手塚治虫は、ただ漫画をかくだけでなく、自分の漫画に子どもたちに対する呼びかけ、メッセージをこめようとしたのである。

手塚治虫は、漫画家生活四十年の長い創作活動^{さくしやく}で、いろいろな種類、いろいろな形の漫画をかいてきたが、終始一かんとして自分の漫画にこめた大きな主張は、「生命を大事にしよう!」ということだった。この主張は、具体的には「自然の保護」「生き物への讃歌」^④「科学文明への疑問」^①「戦争反対」といったテーマに置きかえられて、作品の中で語られている。

例えば、「ブラック・ジャック」の主人公は、医師の免許^{めんぎょ}を持たないがすぐれた外科^{げか}医^いという設定で、かれのメスの前では金持ちも貧ぼうう人も関係なく、そこに共通するのは、守るべきかけがえのない^Aがあるという点だけである。また、「ジャングル大帝」などの動物を主人公にした作品には、生き物がいてこそ、人間が生かされているという「生き物への讃歌」や、「自然の保護」の思いがこめられている。

そして「鉄腕アトム」などのSF^{エッセイ}漫画といわれている手塚作品では、

科学文明が発達した未来における人間の思い上がり^をえがく中で、科学文明の発達^が本^当に人間や生き物の幸^せをもた^らずのかと問^いかけてい^る。さらに、生命^を最もま^つにあ^つか^い、無^数の生命^を一度にほ^ろぼ^すのが戦争^{である}。手塚作品は、「火の鳥」や「紙の砦」^{に至るまで}、生命^の尊^厳さを説^き、戦争^に反対^{する}う^つたえを^つらぬ^かれてい^る。

(石子 順「手塚治虫は生きている」(学校図書)より)

問一 —— 線A「なく」・B「られ」と同じはたらきをするものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | |
|---|--|
| A
ウ おとなしくしないか
エ 考えられないことだ
オ 絵にも書けない美しさ | B
ウ 春の気配が感じられる
エ 先ばいにボールを投げられる
オ 食べられない程の量だ |
|---|--|

問二 —— 1 5 に入る語を次のア〜オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | |
|-------------------------|---------------|
| ア いったい
エ ついに
オ 特に | イ 万一
ウ 結局は |
|-------------------------|---------------|

問三 —— 線①「アイディア」を漢字二字で置き換えた語句があります。その語句を答えなさい。

問四 —— 線②「その喜び」のシンボルとして書かれているものを十一
字で抜き出しなさい。

問五 —— 線③「それ」が指している内容を本文中のことばを用いて十
五字以内で答えなさい。

問六 —— 線④「科学文明への疑い」をよりくわしく述べている部分を
本文中より二十七字で抜き出し、その初めの五字を答えなさい。

問七 —— 線Aに入る語を本文中より抜き出しなさい。